



車いすで「食べる喜び」

横浜の中華レストラン「風の音」

「おいしいものを、楽しみながら味わいたい」。誰もが思う当然の願いだ。しかし、設備や受け入れ態勢などで、体が不自由な人にとってレストランなどでの外食はハードルが高い。そんな中、横浜市瀬谷区三ツ境の中華レストラン「風の音」は、介護施設運営会社が経営するバリアフリーレストランの草分け的存在。オープンから8年、障害者や高齢者の「食べる喜び」を支える同店を訪ねた。

【賀川智子】

バリアフリー最前線 ①

相鉄線三ツ境駅から徒歩15分ほどの住宅街にたたずむ店は、落ち着いた一軒家レストランという雰囲気だ。

入り口のドアから店内にかけて一切、床の段差がなく、廊下の右手には車いすで入れるトイレが3カ所。突き当たりのメインダイニングには、車いすのまま着席して楽に食事ができるよう、天板の高さが一般のものよりやや高い、特注品のテーブルがゆったりと配置されている。健常者が何気なく利用する

飲食店でも、入り口の段差や、テーブルとテーブルの間隔の狭さなどが「バリア」となっており、車いす利用者が入店できない店も多い。「風の音」は、テーブルとテーブルの間隔を広くとり、全席が車いすでも利用が可能。運営する「アイシマ」常務取締役の中谷国晴さんは「70〜80席は設置できるスペースだが（車いすでの利用を可能にするため）、約50席に抑えている」と話す。「風の音」は2008年のオープン。横浜市内などで高

齢者介護施設を運営する「アイシマ」が、利用者家族から「気軽に外食できる場所がほしい」との要望を受け、自社が運営するサービス付き高齢者向け住宅の一階に開業した。

「ボリュームがあり、味もいい。気分をリフレッシュできます」。車いすを利用する大河内正幸さん(61)は、笑顔でこの日のランチの牛肉をほおばった。大河内さんは5年前に脳出血で倒れ左半身まひになった。以前は外食が多く「午前様」もしょっちゅうだったが、生活は一変。坂や段差がおっくうで、外食の機会はずっとなくなっていた。現在、

①車いすのまま入店し、食事ができるように工夫された店内。利用者は笑顔で食事を楽しんでいた。②住宅街にある「風の音」。外部から段差がないまま店内に続く。いずれも横浜市瀬谷区の「風の音」で。



店の2階の住宅に住み、店は月に数回利用するという。同市泉区の車いすの男性(78)は、もともと麺類が好きだが、一般のラーメン店はカウンターでの食事が難しく、諦めていた。3年前、知人から「風の音」を教えてもらい、味も良くすっかりファンに。今は月1度、介護タクシーを利用して訪れ好きな焼きそばを食べるのが楽しみだ。男性は「トイレも広いし、車いすでも安心して利用できるのがうれしい」と話す。

提供する料理にもこだわっている。横浜中華街で長年経験を積んだ中国人料理人を迎え、夕食時間帯には100種類以上のメニューをそろえる。さらに利用者の要望に応じて、その場で追加料金なしで刻み食やとろみ食、減塩食などにも柔軟に対応する。

店の従業員には、介護福祉士の有資格者など、障害者や高齢者の介護に理解のあるスタッフを充てている。近くの介護事業所スタッフの市川明子さん(68)は「車いすなどで場所を取るため、他のレストランだと一般のお客に遠慮してしまうけれど、ここならば大丈夫」と言う。

オープン当初は高齢者施設入居者の利用が多く、一般客からは「高齢者の施設みたい」と不評で赤字が続いたという。だがその後、高齢者、障害者のほか一般の客も増え、ここ数年は黒字だ。中谷さんは「1店が定着したのは、地域の理解も大きい。これからも、障害の有無にかかわらず誰でも気軽に来店でき、満足してもらえるレストランでありたい」と話した。＝おわり